

令和8年度 愛媛・大分交流会議 議事録

開催日時：令和8年7月6日（月） 13:35～14:35

開催場所：大洲イノベーションセンター

出席者：愛媛県知事 中村 時広
大分県知事 佐藤 樹一郎

1 開会

（愛媛県 企画振興部長）

それでは定刻になりました。本日の愛媛・大分交流会議進行役を進めさせていただきます愛媛県企画振興部長の三好でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

開催前に両県知事の机の上にごございますウイスキーについてご紹介させていただきます。本日は開催地であります大洲市様より、市の特産品であります「ひめの琥珀」をご提供いただきました。こちらは生産量日本一を誇る愛媛県産のはだか麦を主原料にした世界でも珍しいクラフトウイスキーとなっております。本日の記念にぜひお持ち帰りいただき、ご堪能いただければと思います。

それでは、ただいまから令和8年度愛媛・大分交流会議を開催いたします。本日の会議は14時35分までとなっております、そのあと記者会見を予定しております。開会にあたりまして、愛媛県中村知事より挨拶を申し上げます。

2 開会あいさつ

（愛媛県 中村知事）

本日はご多用の中、佐藤大分県知事、そして大分県の皆さん、愛媛県まで足を運んでいただきましてありがとうございます。

先ほど大洲の状況につきましては、二宮市長やキタ・マネジメントの高岡さんからご紹介がありましたけれども、8年前に西日本豪雨災害が襲ってきたときに、今では線状降水帯なんていうのは当たり前のように使われていますけども、まだ知られていない時代で、本当に線状降水帯が長時間にわたってとどまったことにより、ここ大洲市、お隣の西予市、そして宇和島市と、この3地域に大変大きな被害の爪痕を残しました。

大洲市一帯が水没するぐらいの肘川の氾濫が起こりまして、それから本当にゼロからのスタートと言ってもいい、立ち直りの期間がこの8年になりました。国に激甚災害の指定を受けまして、先般、国の事業、県の事業、当初の計画より10年前倒しで、堤防整備等、概ね5年で一気にやるというようなことが完了をいたしました。同じだけの水量が襲ってきても氾濫しないだけの治水対策が完了したところでございます。

さらにその上をいく対策が必要で、ダムの問題等々今取り組んでいるところでありますが、治水安全度は飛躍的に増してきたところであります。ただその一方で、大洲市は、その将来を見据えて、まちづくりも並行して進められてきた経緯があります。それが今日ご覧いただいた古民家を活用した分散型の宿泊施設の展開でありました。非常に今人気を博しておりまして、インバウンドを初め多くの方々が宿泊で押し寄せていただけるような県を代表する観光スポットになりつつあるところでございます。被災時には大分県からも大きなご援助、人の派遣をいただいたところで、改めて復興の具合を感じていただけたら幸いです。

今日は非常に歴史的にも深い関係がある大分県、愛媛県の間で、またより密度の濃い関係ができるような会議にしたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

（愛媛県 企画振興部長）

それでは本日の意見交換でございますけれども、項目は4つの項目がございます。サイクリング、教育、伊方発電所、そして豊予海峡と、この4つの意見交換テーマに沿っていただければと思っております。意見交換につきましては、中村知事に進行役をお願いいたします。

す。

3 意見交換

(1) サイクリングを活用した誘客促進のための広域連携について

(愛媛県 中村知事)

それでは私の方で進行を務めさせていただきたいと思います。

まず1つ目の議題ですけれども、サイクリングを活用した誘客促進のための広域連携についてです。私の方からまず発言をさせていただきたいと思います。本県では割と早い段階からサイクリングに目をつけた振興策を展開して参りました。そもそものスタートは15年前だと思えますけれども、しまなみ海道をどう磨き込んでいくかというふうなことを進めていく中で、サイクリング振興にスポットを当てた経緯がございます。そして、第一段階ではしまなみ海道を世界のサイクリストの聖地に、そして第二段階では愛媛県をサイクリングパラダイスに、そして第三段階で四国全体をサイクリングアイランドにというような構想で当時スタートした経緯がございます。現在、愛媛県内28コースのサイクリングコースを設定しておりまして、愛媛県側からであれば、伊予灘・佐田岬せとかぜ海道。これも1つの売りにしておりまして、そこから豊予海峡フェリーを活用した広域周遊が可能ではないかというふうに考えております。

四国4県の連携で四国一周ルートの設定や、また台湾一周とのコラボというのも実現しましたので、これからさらに進化していきたいと思いますが、九州、大分の方でもサイクリング振興に力を入れていただいているということなので、楽しみにしているところでございます。特にサイクリング熱が高く、時差も少なく、消費単価も高く滞在期間も長いオーストラリアというのは非常にいいターゲットになるのではないかなと思うところでございまして、集中的なプロモーションを現在しているところであります。

ルートとしては、大阪、京都から福岡に向かうときに、大体広島で1回止まっている傾向が見えてきました。そこから九州ではなく、下に向けてどうにか引っ張れないかというのが1つの戦略になると思うのですけれども、そうなってくるとそこからまた佐田岬そして大分に行って北上すると、こういうルートというものが考えられるのではないかなというふうに思っております。ぜひご協力いただけたらと思います。

そしてもう1ついい機会なのが、来年の5月に、日本で初開催となります世界最大級の自転車国際会議、欧州サイクリスト連盟主催のvelo-cityが愛媛県で開催することが決定しております。世界中から1000人を超える自転車関係者、特にEUが中心になりますけれども、4日間にわたって、まちづくりにあたっての自転車活用をテーマにした国際会議が開催されることになります。その時にエクスカッション或いは副次的な旅行もあると思いますので、このときに今申し上げたような、しまなみから南下して、また東西へ向かってというようなことが紹介できるとかなり後々のインパクトに繋がるのではないかなというふうに考えておりますのでよろしくお願い申し上げます。

さらに、この10月25日にしまなみ海道、高速道路を全面通行止めにしまして、6時間にわたってサイクリング大会に開放する、7000人規模の4年に1度の大規模大会が開催される予定でございます。大会当日・前日はイベントを実施し、各種ブースの出展をいたしますので、大分県の方々にもぜひご来場いただきたいというふうに思います。以上でございます。

続きまして佐藤知事の方からご発言をお願いいたします。

(大分県 佐藤知事)

今日は本当にありがとうございました。

到着してからキタ・マネジメントの高岡代表からもご案内いただき、また二宮市長さんからもお話いただいたことで、大洲のまちづくりの取組がよく分かりました。大変勉強になりました。誠にありがとうございます。

まず1つ目の議題の自転車でございますけれども、来年5月の自転車国際会議の愛媛県開催、誠におめでとうございます。アジアの中では台湾に次いで2番目の開催ということでございますし、日本では当然、初めての開催ということで、大成功をお祈り申し上げたいと思います。

それから10月25日のサイクリング大会も、先ほどの自転車国際会議とあわせてぜひ私ども

も伺わせていただき、いろんな形でジョインさせていただけるとありがたいと思いますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

昨年度の会議でも欧米豪等の観光客誘致という議論をさせていただきまして、今、中村知事からお話がありましたオーストラリアのサイクリストは、これから大きく発展していく重要なテーマだというふうに考えております。

大分県も、例えば国東半島の周遊コースがあります。また、ツール・ド・九州というのがあります。九州各県と連携しながら、昨年ですと、延岡から佐伯までのコースなど、自転車を使ったまちづくりの取組をしてきております。ぜひ、しまなみ海道という世界的にも大変魅力的なルートと、例えば、大分のやまなみハイウェイを繋げていけると良いなと感じております。今年のツール・ド・九州では、やまなみハイウェイを通して阿蘇に至るというルートを設定しておりますので、そういうところを繋げていけるといいなと感じている次第でございます。

豪州のサイクリストを対象とした両県を周遊するファムツアーを実施する中で、世界のサイクリストが憧れるしまなみ海道と、大分の中ですら有名なやまなみハイウェイを繋ぐような、長期滞在型のサイクリストが走ってみたいと思うようなルートの造成を、両県が一緒になって行い、来年の自転車国際会議などにおいても発信していただければありがたいと思っています。

九州の知事会のときにも、私どもの隣県の愛媛県では、しまなみ海道を活用した魅力の発信、サイクリングの振興というのをやっていますとご紹介をさせていただいております。そのような形で連携をしながら、今後も魅力の発信に取り組ませていただきますと大変ありがたいと思っています。よろしくお願いいたします。

(愛媛県 中村知事)

どうもありがとうございました。

本当に15年前と比較すると、自転車を取り巻く環境というのが大幅に変わったのではないかなというのを最近実感しています。あの当時は本当にロードバイクやクロスバイクに乗るのは特定の人と若い人、自分たちは関係ない、敷居が高いというイメージがすごく強かったのですが、本当に電動アシスト付きのバイクも当時なかったですから、そういったものも普及していく中で、全然違うコンテンツに育ってきたなあということを実感しますので、まさにこれから伸びしろがあるのではないかなと思っていますので、ぜひ連携をさせていただけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(2) 大分・愛媛 高校生教育交流事業について

(愛媛県 中村知事)

それでは次の議題に移らせていただきますが、大分・愛媛高校生教育交流事業についてでございます。こちらは大分県の佐藤知事の方からご発言をお願いしたいと思います。

(大分県 佐藤知事)

ありがとうございます。昨年の交流会議で、観光等の交流、連携に加えまして、高校生同士の交流で教育分野の連携を進めさせていただきたいという提案をいたしました。今年度、両県の高校生による交流事業が実現すると伺っておりまして、大変ありがたく、うれしく思っている次第でございます。両県の高校生が観光振興をテーマに交流する、さらに郷土の魅力を再発見して、そしてまた地域課題を多面的にとらえて解決する、そういう能力を向上させていくということを進めていくというのは大変意義が深いことではないかなと思っています。

今年度、両県の高校生が、観光の専門家、地域の専門家から誘客プロモーションなどを学んでから協働して「豊予海峡横断観光プラン」というのを作成していただくと伺っておりまして、9月25日から27日まで、別府市で「豊予観光クリエイターズキャンプ」を開催していただく予定と伺っているところであります。この豊予海峡の横断観光は1つのケーススタディということだと思いますけれども、このような取組を通じて、両県が次世代の人材の育成で繋がりを、今年は別府でのクリエイターズキャンプということですが、ぜひ次年度は大分県の高校生が愛媛県をお伺いしまして、継続的な交流を続けていただけますと大変ありがたいと思う次第でございます。よろしくお願いいたします。

(愛媛県 中村知事)

どうもありがとうございます。

高校生の交流事業は、私どもも大分県と大いに進めていきたいというふうに基本的に考えております。愛媛県でちょっと紹介させていただきますと、なかなか地方というのは若い人たちの流出がどこでも同じように進んでいまして、これは地方においては大きな課題になっていると思います。いろんな問題があるのですが、その1つの課題として地域の魅力、これは地域の観光資源もそうなのですが産業資源もそう。それを知らずに巣立ってしまうというケースが見受けられます。ということで、中学や高校という多感な青年期に、地方の魅力や産業の存在、こうしたものを若い人たちに知ってもらうということが非常に重要ではないか。そこが浸透すれば、社会に出ていくときの選択肢として、地方が入ってくると、それを知らないからこそ、都会へ憧れるのはしょうがないのですが、何もないという前提で都会の方に目が向いてしまうということだけは避けられるのではないかとということで、中学生の職場体験事業と同時に、高校生向けに、さらに1歩踏み込んで、体験するだけでなく、地域や企業と一緒に、そのエリアの、或いは企業の課題解決に取り組んでもらうという事業を全高校で展開しています。ソーシャルチャレンジ for High School という事業名にしていますけれども、そういったことに力を入れておりますので、高校生の自主的な活動をサポートするという重要性を本当に痛感しているところでございます。

そしてもう1つは、やはりこの人口減少の現実を目の前にして、既存の高校をこれからも永続的に存続していくのは無理だというふうに判断をいたしました。3年前に高校の再編を一気にやるということで再編の計画を打ち出させていただきました。もちろんOBの皆さんからは、自分たちの学校が消えるのはどうなのだ、反対だ、という署名運動が起こり、いろんな声もいただきましたが、あくまでも生徒第1で考えましょう、少なくなってしまうたら同級生も先輩も後輩も数が減っていくということじゃないですか、卒業したときにこれが子どもたちにとって最大の財産じゃないですか。そう考えるとある程度の規模は必要と判断せざるをえない、子どもファーストで考えたときに再編は避けられない、というような説得をもって乗り切ってきた経緯がございます。

再編について、当初の計画通り今進めているのですが、その時に、ただ単に数の問題だけではなくて、その先も見据えて、各高校の独自性をどう出していくか、これを各学校でじっくりと考えて欲しいというようなテーマを投げかけているところでございます。

あるところでは、長浜高等学校でありますけれども、水族館部っていうのを大々的に作って全国から人が来るようになったり、あるところでは馬術というものに特化した高校運営をしたり、あるところではゲームのデザイン、これを前面に出した運営をしたり、各高校すごい今いろんな工夫をしてくれています。

その中に三崎高校の存在がございます。三崎高校も一時、分校化が避けられないという状況まで追い込まれていました。でも今は、全国から生徒さんが来るようになりまして、伊方町もそういった県外から来る高校生を受けるために、伊方町自らが寮をどんどん作って高校復活に結びついていきます。東京あたりからもかなり来てまして、この子たちが自発的に東京へ行って、地方で高校生活送りませんか、学びませんかというプロモーションまでやってくれています。そういうようなですね三崎高校ですから、令和6年度に普通科を社会共創科、という科に改編をいたしました。県内の全日制高校最小の週29時間授業を実施しておりまして、生徒による放課後の主体的なゼミや探究活動に力点を置いた学校運営にしています。ちょっと面白い感じで、高校のカリキュラムが決まっていまして、そういう中で大分県との交流事業というのは非常にいい機会だと思います。

著名な温泉地を抱えている大分県、そしてまたサバやアジ、水産資源は共有できているということ、観光資源も結びつきやすいということ、いろんなことを考えていくと、この両県の高校生同士で考えるアイデアっていうのは非常に面白いのかなという。対岸から見ているから気づかない点がお互いあるのかもしれないし、そこから豊予海峡を超えて人、経済が動くのかを考える共創型のセミナーの実施が予定されておりますので、精一杯愛媛県側も応援をしたいというふうに思っていますのでよろしくお願いいたします。以上です。

(大分県 佐藤知事)

ありがとうございました。

高校のあり方は、大分県でも同じようにこれからいろんな取組をしていかなければいけないといけませんけれども、それぞれの地域で高校というのが、地域にとって非常に大事な役割を持っているというのを感じておりまして、新しい技術でいうと遠隔教育も活用していこうと進めております。

1ヶ所から配信して、それを受けることによって、いろんな高校で、どこかの高校にいかないと受けられないということではなく、離れていてもいろんな授業を受けることができ、進路が得られる、そういう取り組みもやっていこうということで、これからますますいろんな特色を出していく取組と、それからいろんな工夫が必要になってくると思いますので、そういう高校教育のあり方もぜひまたいろいろと私たちも勉強させていただければと思います。全国から生徒さんが来ている、その一番の魅力というのはどこにあるのでしょうか。

(愛媛県 中村知事)

東京、都会からは、何ていうんですかね、自然環境の豊かさと、やっぱり実体験している、ここで学んでいる生徒自らがプロモーションしてるってのはすごく大きいと思います。

それともう1つのこの大洲にある長浜高校は、ここもかつて分校化の危機だったんですけども、今県内で志願倍率が高い学校の一つで、ここはもう完全に水族館部が国際大会で賞を取ってから全国ニュースに流れたり、ともかくあそこで水族館部に入りたいと、そういうふうな気持ちを持った生徒が全国から来るんですよ。こちらは大洲市と地域の住民の皆さんも協力して、受け入れ体制を整えていただいたんですね。だからそれが非常に地域あげてということになっているので、全校生徒のうち水族館部に7割を超える生徒が入部しています。入部したときから自分の受け持ち水槽が決まっていたりですね。本当にそこから関連する世界に進みたいというので大学進んでいたり、非常にいい相乗効果がありますね。

(大分県 佐藤知事)

やはり地域にとって大事な存在だというのがそういう努力に繋がっているということですね。

そういう成功したケースというのを、私たちもぜひ共有させていただきたいと思います。大分県もいくつかの高校が全国募集になっていまして、校長先生が、例えば東京である大分県人会の時に来て、全国募集していますので、ぜひお父さん方、元々ゆかりがある方々でしょうから、大分の高校に進学させませんかということを働きかたりしています。学校がやはりそういうところで校長先生も含めて努力をしています。

(3) 伊方発電所の安全対策及び防災対策について

(愛媛県 中村知事)

それでは続きまして、伊方発電所の安全対策及び防災対策についてございます。

こちらは伊方発電所がございますので、私の方から発言をさせていただきたいと思います。

大分県とは平成23年度に伊方発電所の異常時の通報連絡や本県からの避難者受け入れなどに係る確認書を取り交わしていただきました。それ以来連携を深めておりまして、平成27年度からは、防災部局の人事交流を行い、避難者受入に関して、大分県内の各市町村の避難先候補施設を愛媛県地域防災計画に反映させていただいております。

昨年度はちょうど直前に佐賀県で大規模火災が発生いたしました。心からお見舞いを申し上げます。残念ながら防災訓練の参加を見合わせる事態となりましたけれども、例年、この訓練にご参加をいただいておりますので、本年度は昨年度実施できなかった、大分海上保安部との大分への海路避難訓練の実施に向け、現在、ご協力をいただいているところでございます。

本当にこれまでいただいた多大なるご支援に対しまして、愛媛県を代表して心から感謝を申し上げます。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

これまでもお伝えして参りましたが、伊方発電所については国の安全対策に任せきりだけでは足りないという前提で、向き合ってきた経緯があります。私がちょうど就任した3ヶ月

後に、東日本大震災が発災をいたしましたので、就任した1期目ってというのはもうこの原発対策に追われるような任期でありました。

伊方の場合、いろんなこと僕も素人だったのですが、本当にメカニズムの関係や、それから地形、どの場所に位置しているかによって対応は異なってくるということも明らかになりましたし、それぞれの地域ごとに安全対策も違ってしかなるべきだというふうに当時感じました。そこで、国の求める安全対策はあくまで必要十分条件であるにすぎない。あとは地域ごとに独自のアディショナルな安全対策を築くたびに突きつけていくと、この姿勢を基本に置くべきだと当時考えました。以来、8項目にわたって、独自の、国が求めている安全対策を愛媛県として四国電力に対して求め続けてきた経緯があります。例えば、当時原子力本部は香川県にありましたが、速やかに愛媛県に移転するよう要請。それから当時は570ガルの基準地震動で対応していた原発でしたが国の新たな知見で650ガルに引き上げるという基準が設けられましたが、それは必要十分条件で、愛媛県としてはおおむね1000ガルの対応力を求めるということで、伊方3号機については現在もうすでにおおむね1000ガルの補強工事が完了しています。

それから生命線は電源でありますけれども、電源喪失により原子炉を冷却することができなくなる事態となったものが、福島第一原子力発電所事故でありましたので、これさえ、電源さえあれば注水できたはずなのだと考えると、電源対策こそが生命線で、国はこれを全国一律で大型の非常用ディーゼル発電機の配備を決めましたけれども、これも必要十分条件だということで、国は求めていませんでしたが、伊方の場合は、伊方の上にある亀浦変電所から1号機2号機3号機に新たな配電線をアディショナルに敷設していただきたいという要請をかけ、実施済みでございます。

そして、丁寧な説明こそ重要ということで、毎年半径20キロ以内にある3万軒の家に四国電力の社員が手分けして現状等々の説明を実施していただくということも丁寧にやっていたので、その声を公表するというような仕組みにしております。

その他にも様々な8つの項目で設けておりますが、実はその中で最も重要なことが、報告連絡体制でございます。この体制、えひめ方式と言っていますけれども、全国の原子力発電所、電力会社で同じことをやっているところはありません。愛媛県のみであります。その中身は、伊方発電所で何かがあった場合、多少のことでも、例えばはしごが1つ欠けていたとか、関係のないごみが落ちていたとか、もう何か変化があった場合は速やかに明らかにすると、通常の電力会社は何か異常があった場合は本社に連絡が行く段取りになっていますけれども、伊方の場合は本社と同時に愛媛県に連絡が入ることになっています。

愛媛県に入ったものを、愛媛県が一定のルールに基づいて公表します。翌日公表、当日公表すべて区分で事前に決めてありますので、その発表については愛媛県が行うことになっています。通常は電力会社の広報が行うことになっているはずであります。何でこんなことしているかという、隠し事は絶対にさせない、という強い決意であります。ここの部分がおろそかになった場合は、電力会社と愛媛県の信頼関係は木っ端微塵だというようなことも常に申し上げておりますので、これに基づいて愛媛県は大分県に対しても連絡を速やかにしているという体制になっておりますので、ここだけのご信頼いただいていいのではないかなというふうに思っております。

そしていろんなことが動き始めておまして、まずは1号機2号機については廃炉が決定しております。ただこの廃炉も、福島原発は沸騰水型の原子炉で、1号機2号機の伊方発電所の加圧水型の原子炉で、加圧水型の原子炉の廃炉というのは経験ありません。全部模索でやっていかざるをえないので、第一段階から第四段階まで含めると、40年かかる、こういうふうに見えています。現在ようやく第一段階が完了して次に移行していく段階もございますので、これも全部公表しながら丁寧に進めていきたいというふうに思っております。

それから3号機につきましては、これ長期施設管理計画を策定して、原子力規制委員会、国の方に申請して、令和7年3月に認可を受けておりますが、愛媛県においても、環境安全管理委員会の方で確認し、妥当という判断をしました。

ただ、今後も人材の確保育成にしっかりと取り組みを要請しているところであります。いずれにしても、3号機はもちろん、これからも安全第1で対応を求めていきますけれども、人為的に発生するミスも含め逐一全部公表していますので、常にプレッシャーを受けながら、一番

最優先は原発の安全管理だということを突きつけ続けていきたいというふうに思います。

最後に乾式貯蔵につきましては、これもあくまでも一時的な保存であるということは何度も面会ごとに確認をとっておりますし、国に対しても、言質をとっているところでございます。

特に使用済燃料の搬出計画、最終処分については、国に対して幾度となく要請を続けておりますのでこの姿勢も継続していきたいというふうに思います。

以上で私からの報告とさせていただきますので、佐藤知事の方から何かございましたら、いかがでしょうか。

(大分県 佐藤知事)

伊方発電所につきまして大変詳しい説明をいただきまして誠にありがとうございます。

最初に昨年の避難訓練ですが、佐賀関の大火のために参加をすることができず申し訳ありませんでした。また、佐賀関の大火のときには義援金をお送りいただきまして、心から感謝を申し上げます。

避難訓練、やはり佐田岬の伊方発電所よりも西に住んでいらっしゃる方々を含めて大事な避難訓練でございます。昨年は、愛媛県と調整をしながら、予定していた由布市との訓練準備を通じまして、受入手順の確認等はできておりますけれども、今年は実働訓練ということでしっかり私どもも取り組ませていただきたいと思いますので、何卒よろしくお願い申し上げます。そして確認書がございますけれど、異常が発生したときの通報は毎回、届けていただいております。本当にありがとうございます。

先ほど中村知事がおっしゃいました、おおむね 1000 ガルでございますとか、3 万軒の家への説明でありますとか、また亀浦からの配電線の確保でありますとか、私どもも非常に伊方から近いところに、家のある住民もおりますし、また漁船のこともありますので、そういう意味では大変ありがたく思っておりますし、また引き続き、四国電力に対して安全対策の徹底、要請をしていただくようお願いを申し上げたいと思います。

先ほど報告連絡の関係もお話いただきましたけど、やはり最近の原子力を取り巻く状況を見ますと、これが何より大事で信頼性を維持する、損なわない、電力会社等に対する、これは原子力政策、原発政策では何より大事だと思いますので、そのような取組をしていただいていることに重ねて感謝申し上げますとともに、引き続き、ぜひよろしくお願いを申し上げたいと存じます。ありがとうございました。

(愛媛県 中村知事)

どうもありがとうございました。

それでは続きまして、最後の議題に移りたいと思います。豊予海峡ルート構想の早期実現に向けた取り組みの推進についてでございます。こちらについては佐藤知事からのご発言をお願いいたします。

(4) 豊予海峡ルート構想の早期実現に向けた取組の推進について

(大分県 佐藤知事)

ありがとうございます。

この豊予海峡構想につきましても、従来からご協力をいただいております感謝申し上げます。この「広域交通ネットワークシンポジウム」のときにはいつも愛媛県から、部長さんもお参加いただいておりますし、また、新幹線の関係については、決起集会でありますとかいろんな形で歩調を合わせて取組をしていただいておりますことに感謝申し上げます。

今回、ご報告申し上げたいと思いますのは、特に道路の方の豊後伊予連絡道路の実現に向けた取組ですけれども、お配りしている「豊予海峡ルート技術的調査の概要」をちょっと見ていただきますと、私どもも申し訳なかったという思いもあるのですが、私が大分市のときに計算したら、海峡部が今まで大体シールド工法で 5000 億円ぐらいで掘れていたのですが、これは私どもが計算したのですよということであったのですが、今度、山岳工法（ナトム工法）で掘ると 9300 億円になりましてですね、ちょっと一部報道で、三崎から保内のところまでの数字が、報道されたりもしましたけど、私どもはやはりこの海峡部の 9300 億のところを 1

つ、これからの検討のベースとしまして、どのぐらいの需要想定で、もしできると、どのぐらいの方が渡ることになる、そういうことをこれから検討して参りたいと考えております。

シールド工法で掘りますとゴリゴリと本当に1本だけで良いので5000億ぐらいだったのですが、ナトム工法で掘ると3本ぐらいですね、作業坑とかが入りましてちょっと値段が上がっておりますけど、一応、青函トンネルがこのナトム工法で掘っているので同じでやりましたけど、シールド工法についての可能性も全く捨てる必要はないということでございます。ただ、今後やはりいろいろな金額をベースにしながら検討していく必要があるということで、この数字となりました。

そしてこのような調査を踏まえまして、今回、内閣府からですねPFI事業の調査事業補助金というのをもらうことになりまして、それを受けて、有料道路事業スキームで調査をした場合に、どういうふうな課題でありますとかどういうふうな展望が開けるだろうかというのを「豊予海峡ルート官民連携投資研究会」という研究会を設けまして、検討することになります。これ7月の終わりごろからスタートすることにしていきます。

前の日本郵政の社長さんでした、増田寛也さんに座長になってもらいまして、大学の先生とか建設業、インフラ関係の方々、金融機関とか、経済団体、行政機関の方々と、有識者を構成して検討したいということで、来年の春以降に最終報告を出してPFIでやったらどれぐらいの絵が描けるか。9300億ですけど、例えば今の九四フェリーさんの通行量をベースに想定したときに、何年ぐらいで、元が取れるような計算があるのかとか。ただおそらく、いろんな方々と議論しても、いろいろリスクが発生しますので、例えばコンセッションでやるにしても、それ以上のリスクが発生したときのカバーというのは国であるとか、公的なところがやらないと、もともと進まないということになるということだと思いますので、こういうふうなPFIを議論したときに、国とか、或いは公共の役割はどういうところであるのか。そういうところをちゃんとしていく必要があるのかなと。そういう絵を描いて、国の方に、改めてしっかりと、本来、国がやるべき事業だと思いますので、示していければ良いかなと思います。

お願い申し上げたいのは、ぜひ検討会、「豊予海峡ルート官民連携投資研究会」に愛媛県にも参画いただくことを検討していただけますとありがたいなと思っている次第でございます。このような取組で絵が描ければ、例えば国交省の道路局長さんとかと話をしても、なかなか海峡部ってというのは、今まで扱いが将来の問題として取り組むということになっていたわけでございます。そういうところの国民的なコンセンサスが必要ですねということを国交大臣も答弁をしていらっしゃるんですけど、今回も骨太の方針の中でも少し扱いを変えていただけるような議論も漏れ聞こえてきておりまして、ということであればやはり私どもでいうと、中九州横断道路、それから先ほどお話いただきました大洲から繋いでいくその道、それを繋げていくことによって、大洲市も含めて、より両側からのアクセスが可能になって、そしてまちづくりについても非常に大きな効果があるではないかなと考えている次第でございます。

そういう意味で国、本来やはりこういう四国と中国もそうだったと思うのですが、国のプロジェクトとして進めていくべきですけど、その中でどれぐらいPFIの可能性があり得る、特に下関北九州道路も同じようにPFIの活用ということを国から求められているようでありまして、ただ九四フェリーが通っている分だけおそらくPFIの検討というのは豊予海峡の方がやりやすいのではないかと考えております。

ぜひ愛媛県からこれまでフォーラムでありますとかシンポジウムでご参加いただいたようなことも大変ありがたく思っておりますので、ぜひご参加いただけるとありがたいといったお願いでございます。

それから新幹線の方も、「四国新幹線」、「東九州新幹線」ということで、1月に、全国6基本計画路線のみんなで集まって決起大会がありました非常に大きな力になりまして、これもおそらく骨太の方針の中にケーススタディが書かれるというふうに思っております。

私どもとしましては、大分県の立場から、大分県を通るすべての基本計画路線のケーススタディを出して欲しいということを申し上げますけど、東九州新幹線の方は4県の知事と北九州市のメンバーですので一緒にまた要望に行こうということではしておりますが、四国新幹線の方も、四国でどういうふうな議論されているかを十分存じ上げている上で、やはり完成形としましては、四国と九州が、松山と大分が繋がることによりまして、九州の新幹線の高速交通ネットワーク網、高速鉄道網と四国の鉄道網が繋がっていく。これをやはり完成形と

目指して取組をしていきたいという強い希望がございます。

そのようなことで四国の皆様の取組には敬意を表して、また経緯も尊重申し上げ、また四国新幹線もケーススタディの対象になることを私たちも期待しておりますので、その上で、最終形を目指してまたぜひ取組をお願い申し上げたいなど。以上です。

(愛媛県 中村知事)

どうもありがとうございました。

まず、豊予海峡ルートそのものについては、四国と九州がトンネルで結ばれることによって、生じるであろう交流の拡大が、人だけでなく、経済、あらゆる面で寄与することは間違いないと思います。

また、災害時の避難、それから相互応援の迅速化などにも大きく寄与する交通インフラであるというのが共通認識ではなかろうかというふうに思います。

一方で、本当に昔だったら、第2国土軸ですかね。太平洋新国土軸の一翼を担う重要な国家プロジェクトであると、これはもう位置付けられているわけですから、しかも昨日今日の話ではなくて、随分昔からの構想として、技術的には実現可能と、国も追っかけてきた経緯があります。

ただ、本当にバブルの崩壊以降、大胆な国家プロジェクトとか、大胆な国家戦略を掲げる政治家の言動が本当になくなってきてしまっているということを最近痛感していますので、知事会の地方創生本部でも、国の大胆な国家戦略、そして責任を持ったプロジェクトの推進を求めるといような表記もあえてさせていただいた経緯がございます。

その中に、この豊予海峡ルートも当然位置付けられてくるものというふうに考えておりますけども、一方で今の段階では国も具体的な調査を行っているわけでもなく、また今後、PFIも含めて地元の課題も、実現期間であるとかいろんな課題もあると思いますので、しっかりとその課題に向き合っていく必要があると思います。そして今ご提案のあったPFIも、ものによって合う場合、合わない場合あると思いますけど、十分検討の価値ありというふうに考えております。

豊予海峡ルート官民連携投資研究会でこれを検討していくのだということで、また一体型トンネル等を検討する技術研究会についても、実現可能性の検討などを行うことは意義があるというふうに思いますので、愛媛県としても参加をしたいというふうに思っております。

また、四国の新幹線ですけれども、整備計画格上げに向けて4県、これが当時ちょっと1県だけが路線の問題で歩調が合ってなかったんですけど、もう完全一致しましたので、格段に状況が変わって参りました。

そんな中で、本年1月お話があったように総決起大会が1ヶ所だけでなく、みんなでやろうということで共同開催されましたけども、非常に有意義だというふうに思っておりますので、次回の大会も愛媛県としてもぜひ参加したいというふうに思っています。

また、例年大分県で実施しています九州・四国広域交通ネットワークシンポジウムにも引き続き参加を検討していきたいというふうに思っております。

そして最後に、豊予海峡ルート推進協議会の要望活動に関係市町を巻き込むことについても、地元が一致結束して要望することは、フィールドも強くなると思いますので、本県としても賛同したいというふうに思います。以上でございます。

それではそろそろ議題も終わりましたのでここからの進行は司会に返させていただきたいと思えます。

4 閉会あいさつ

(愛媛県 企画振興部長)

お疲れ様でした。以上で本日の意見交換を終了させていただきます。ありがとうございました。最後に閉会にあたり、大分県佐藤知事からごあいさつをお願いしたいと思います。

(大分県 佐藤知事)

本日はこのような場を設けていただきまして、そしてまた大変有意義な意見交換をしていた

できましたことに心から感謝申し上げたいと思います。

まず、歴史ある建造物を活用した大洲市の大変魅力的な観光まちづくりを見させていただきまして本当に勉強になりました。

大分県で言っても、臼杵市とか杵築市とか、それから豊後高田市も「昭和の町」ということで取り組んでいますけど、これからの構想として、このまちづくりに本当に参考にさせていただきたい取組のご紹介、ご案内をいただきました。そして会議におきまして、観光振興、教育、防災・減災、広域交通ネットワークということで、大変私どもにとりましてもまた両県にとって重要な4つのテーマが議論でき、大変有意義な会議だったと感じております。そして、特に広域交通ネットワークにつきましては、従来からご協力をいただきながら取り組ませていただいておりますし、また伊方の高門町長さんも一緒に、シンポジウムに参加いただいたりしておりますけれども、大変心強いご発言をいただきまして、心から感謝申し上げたいと思います。

これは新幹線の話になりますけど、国交省の副大臣によりますと、今まで全く動いてなかった動きが半歩前進をしたということで、おっしゃっておられる通りですね。

それからもう1つは責任ある積極財政によりまして、豊かな強い日本列島を作るという今の政権の考え方これによって、一步、また前に進める時期が来ているのではないかなと感じておりますので、何卒、また引き続きのご協力、連携をよろしくお願い申し上げたいと思います。

中村知事初め、愛媛県の皆様には、去年は大分県の「関崎みらい海星館」にお越しいただきましたけど、また来年もぜひ大分県にお越しをいただきまして、引き続きこの交流会を開催することができればと考えておりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございました。

(愛媛県 企画振興部長)

どうもありがとうございました。それではこれもちまして、令和8年度愛媛・大分交流会議を終了いたします。本日はご協力いただきありがとうございました。

5 終了後の囲み記者会見

日時：令和8年7月6日(月) 14:35～14:55

場所：大洲イノベーションセンター

(愛媛県 企画振興部長)

引き続いてではあるのですが、これより記者会見の方を行います。

ご質問のある社は挙手の上、社名とお名前をおっしゃっていただいてからご質問をお願いします。どなたからでも結構です。

(記者)

愛媛朝日テレビと申します。よろしくお願いいたします。両知事に2点お伺いさせていただきます。

まず1点目ですけれども、冒頭中村知事から西日本豪雨のお話がありましたが、昨日、愛媛県の宇和島市でも、土砂災害や道路の冠水などがありました。大分県でも同様に冠水などがあったと聞いております。

改めて明日でこの西日本豪雨の発生から8年を迎える中で、この西日本豪雨災害や、今後予想されている南海トラフのような大規模災害に向けた両県の連携についてお聞きしたいと思います。

(愛媛県 中村知事)

ちょうど昨日、私仕事で宇和島に行ってきたのですが、すさまじい豪雨に見舞われた、まさに現場にいたところでございます。残念ながら土砂でやられたところとか、局所的に出ていますけれども、人的被害がなかったことは何よりでございます。速やかな対処をしていき

いというふうに思います。

西日本豪雨災害からもう8年という月日が経過しますけども、何よりも今日の大洲を始めとして、皆さんが諦めずに、前を向いてくれたこと、しかもその中で特に今日のこの大洲はあれだけの災害の対応をしつつも、その次の段階も考えて、観光政策も同時並行して推進してきたその歩みに、心から拍手を送りたいというふうに思っています。

あれから速やかに国と県が協議して、激甚災害の指定を受けて、対処対応策を速やかに進めて参りまして、国の事業も県の事業も1つの段階をこえました。そのことによって、あのときと同等の雨量が来ても、氾濫はしないという対処はできています。ただそれ以上のことが100%ないとは言いきれませんが、これからは支流の整備や、或いはダムへの対応であるとか、引き続き継続して対策をぬかりなく行っていきたいというふうに思います。

また南海トラフ地震については同じようにいつどこで起こるかわかりません。一番大事なことはやっぱり何と云っても、避難、でございます。建物等は後で取り返しがつきましますけれども、人命だけはそうはいかないので、その事に重きを置いた避難訓練、或いは愛媛県大分県も力入れている防災士のソフト面での対応策、こういったことにしっかりと対応すると同時に、お金も時間もかかりますけども、もちろん地域ごとに異なる耐震対応の対策も引き続き行っていきたいというふうに思います。

以上です。

(大分県 佐藤知事)

災害に強いまちづくりというのは全ての行政の上で、ベースになってくると思います。安心・元気・未来創造ということでやっていますけど、その一丁目一番地に置いているのが災害、防災であります。そして中村知事がおっしゃったのと同じように、災害死を、災害関連死も含めてゼロにするという取組を今までもやってきております。これからもやっていきたいと思っております。

今までの8年間それから10年の取り組みで、やはり少しずつですけれども、同じように雨が降っても、それ以上降っても溢れないような川の作り、そういう取組というのは進んできていると思います。

もう1つ、佐賀関の大火で分かったのはコミュニティのあり方がすごく大事で、この11月18日の大火のときも、火の元の方がお一人お亡くなりになりましたが、住人のコミュニティが強くて声を掛け合って、寝ていた人の家の中に入って行って、叩き起こして、避難をさせ、そして避難所の運営もみんなで助け合って、インフルエンザが流行っていましたが、災害関連死もゼロで済んで復興の段階に移っていますけど、そういう災害に対する意識とできるだけ早く避難するという意識と、それからコミュニティで助け合って、災害に強い地域づくりをしていくというそういう意識のソフト面をあわせて、取り組んでいくということが大事だと思っております。南海トラフも同じ取組をしていくということが重要だというふうに考えます。

(記者)

ありがとうございます。もう1点だけ、本日の交流会議での議題にもありました豊予海峡ルートの構想についてお聞きします。

先ほど中村知事も、民間企業のノウハウや資金を活用するPFI方式を検討する調査会や調査研究会に賛同されたと思うのですが、今後、その研究会の具体的な立ち上げの時期ですとか、いつごろその調査検討されるかというようなちょっと具体的なスケジュールと、あと豊予海峡ルート自体の早期実現ということで、もしそれらに対してもスケジュール感のようなものがあればお願いいたします。

(大分県 佐藤知事)

PFIの研究会は7月の終わり頃にスタートして、そして4回ぐらい検討した上で、来年の春ぐらいには結論を得たいと思っています。そして、それを国に示すことによりまして、民間の活力を活用してここまでできそうなので、ただ、やはりこういうプロジェクトというのは国、公共が主体で進めるべきプロジェクトであるので、こういうことを踏まえて、国としてどうい

ふうに進めていくかということについての議論を行っていくと。それによってまた来年、骨太の方針がまた作られると思うのですが、文章の中に反映をさせることによって、国としてのプロジェクトに近づいていきたいと考えております。

九州、大分を通る大きなプロジェクトとして中九州横断道路というのがありまして、当初の予定で大体 8000 億円ぐらいの大分と熊本の 120 キロを繋ぐ高規格道路のプロジェクトなのですが、そこと海峡部ということを除くとなにも変わらないのですね。海底が繋がるだけの話でありまして、高規格道路を整備するという意味では変わりません。ですから、どれをどの程度民間の活力を使ってできるか、それが先程申しました通り、九四フェリーが通っているというところで、民間の力で今運んでいただいているわけです。そこをベースに考えたときにどうなるかというのは非常に PFI の検討がしやすいのではないかなと思っておりまして、そういうところでやっていきます。

もう 1 つは、先ほど中村知事からお話いただきました通り、技術的な面などこでありますとかシールド工法とかありますけど、その他に豊後伊予連絡道路っていうのは道路だけなのですが、それ以外にその中に鉄道と道路と、それから今課題となっている九州電力と四国電力が電力を持ち合うための送電線を通すようなトンネル、それは全部まとめてどうしたらどうなるかとか、それから世界的に言うと、もっといろんな検討がされています。

EV だけが通るためのトンネルがアメリカではどんどん進んでいますし、いろんな新しい技術の進歩もありますので、そういうものを技術的な検討として別途進めていって、これは両輪で進めていきたいと考えております。

(愛媛県 中村知事)

まずスケジュールについては佐藤知事の言われた通り、本県も共同参加をしていきたいというふうに思っております。こうした公共インフラの民間投資については実はかなり早い段階から提唱した方もいらっしゃいました。

1 回調べてみて驚いたのがしまなみ海道の来島海峡大橋、当時日本最大の三連橋をやると言ったときに、PFI 方式でやるべきだと提唱されていた方がいらっしゃったのですね。それは来島どっく、造船業を経営されていた坪内寿夫さんという方でした。ただ、当時は、日本の国そのものがそうした手法に対しての経験もない、発想もない時代なので一笑に付されたような時代だったそうであります。ただその時期に提唱されていたことに驚きを禁じえなかったのですが、もうそれから随分と月日が流れて、一部では実施される事業も出て参りました。愛媛県でも、県立中央病院は PFI 方式で運営をしているところでもありますけども、ただこれをやってみてですね、PFI にそぐう場合とそぐわない場合、いろんな面があると思います。だからこそ、この研究会というのはすごく大事で、PFI 方式で、どこまでできるのか検討するのは専門家で議論していく必要があるので非常にタイムリーな提案をしていただいたのではなかろうかなというふうに思っております。

それからもう 1 点はさっきもちろっと申し上げたのですが、昔は日本列島改造じゃないのですが、やっぱり国が発展していく、その一番の源は国家の大胆な戦略にあるというふうに思いました。しかしながら、今はもう本当に単年度の予算に追っかけられる、ちょっとお金が出るとばらまき予算に使われる、本当に近視眼的な政策しかなかなか打ち出せない現実があると思うんですね。

でも、今佐藤知事からもお話があったように、他国では EV 専用のトンネルを大胆に作るのか、もう大胆な戦略で新たな経済をつくり出す、新たなビジネスをつくり出す、新たなマーケットをつくり出すというエネルギーが生まれ始めていますので、そろそろ日本も国が大胆な国家プロジェクト戦略を持って欲しいと、非常にわかりやすい新幹線しかり、こうした豊予海峡しかり、それぐらいの壮大な発想で物事を進めて欲しいと心から願っています。

(記者)

愛媛新聞の長谷川と申します。よろしくお願いします。

両知事にお伺いをしたいのですが、豊予海峡ルートの推進について先ほどから議論になっていると思うのですが、7 月にその研究会の実施となって愛媛県はそこに参加をする想定だというふうに伺いました。

一方で、先ほども高規格道路の話が出ましたが、愛媛県内で、まだその高規格道路の整備であるとか、新幹線であるとかっていうのは議論されていると思うのですがなかなか豊予海峡ルートに対する機運の醸成であるとかができていたとはいえないかなと思っています。

その辺りを、改めてどのように一般県民であるとか両県の県民を盛り上げていくのかというところを教えてくださいたいのですけれどもよろしいでしょうか。

(大分県 佐藤知事)

大分県も同じような課題がございます。全ての県民の皆さんが豊予海峡をぜひ繋ぐべきだという機運の醸成がまだとてもできている状況ではありませんし、県内の他に多くの道路の需要もあって、プライオリティについてもいろんな意見があります。そのような中で、この豊予海峡について言うと、中村知事もおっしゃった通り、最も大きなプロジェクトとして、唯一、4つの島の中で繋がっていない九州、四国を繋ぐことによって、どういう効果が期待できるのか、産業の振興、観光の振興、それから橋の確保による災害に強い国土づくり、そういったいろんなメリットについて、丁寧に発信をしていくと。そして、このような研究会のアウトプットについても一つ一つ発信をしていくことによって多くの県民の皆さんと、それから国会で議論されるときは、国民的なコンセンサスが必要と国土交通大臣からいつも答弁されますので、国民的なコンセンサスをどうやっていくのか、そういう取組というのを並行して進めていくということが大変重要だと考えています。

(愛媛県 中村知事)

何事も、発展にせよ、発明にせよ、誰かの大胆な発想からしか生まれるものではないと思うのです。そういったものはいつの時代でも賛否両論あって、その中で必要性が議論される、或いは技術的な研究が進められる、財政的な裏打ちが出されていく、そういう段取りで賛同者が増えていき、醸成されていく、そして実現するものだと思います。ですから、今こういう事業、新幹線もそうですけども、今日言ったからといって明日できるような話ではなくて、息の長いものだと思います。だからこそ、最初のステップ、大胆な発想を打ち上げるということは必要であって、そこで研究していけばいいのではないかなというふうに思います。そのステップを最初から否定してしまった場合、社会の進歩はないとも言えるのではないかなと思っています。

特にこうした国家プロジェクトについては、先ほどから繰り返し申し上げているように、やっぱり本当に近視眼的でない将来を見据えた国家戦略というものが大前提になれば、実現できるものではないというふうに思いますのでそこは期待したいと思います。

(記者)

大分合同新聞です。両知事にお聞きしたいと思います。

今回の研究会に、それぞれ例えば大分県にとっては愛媛県さんが参加することにどのような役割ですとか期待をされるか、愛媛県にとっては、これに参加することにどのようなメリットといいますか、どのような可能性を感じていらっしゃるかそれぞれお願いします。

(大分県 佐藤知事)

私どもとしましては、豊後伊予連絡道路は、おそらく国道 197 号線に当たるわけで、両岸に 197 号線で、佐賀関まで来て、三崎の先からまた 197 号線がずっと繋がっているわけですね、ということで豊後伊予連絡道路は、やはり大分県と愛媛県を繋ぐことで、それが九州と四国を繋ぐのです。これが横断的にずっと西日本を繋いでいく大動脈になるプロジェクトであるという意味で、将来的には当然、これは愛媛県と大分県が当事者県になるプロジェクトになります。そのようなお立場でといいますか、そのようなことも踏まえていただいてご参加をいただけるとありがたいと思っています。

(愛媛県 中村知事)

愛媛県は、四国に位置していますから、四国というのはご案内の通り、唯一新幹線も通って

いない状況にあります。そういう中で、公共インフラの整備というのは、本当にまだまだこれからという部分もたくさんありますけれども、そもそもこの豊後水道の問題、豊予海峡の問題については、昨日今日の話ではなくて、そもそもの昔の先人たちが、国土軸を考えていく中で十分に可能性はあるというふうに絵を描いた経緯があります。

あとは、これをどういうステップで実現していくのかというのは、まだまだ見えてきている段階ではありませんけれども、そうした過去の経緯を引き継いで、将来の可能性につなげていくためにも、研究をするというのは非常にいいなと思っていますので、特に今回 PFI の研究とか具体的な技術面での検討というものについては、本当に意味があると思いますから、大いに参加をしたいというふうに思っています。

(記者)

読売新聞の池田といいます。

同じようにまた豊予海峡ルートの関係で、ちょっと幾つか確認をさせてもらいたかったのですが、設置の時期ですけれども7月の終わりごろといいますのは、今月下旬、に一応この研究会を設置されて、来年の春先に結論を出されると、年度内という理解でよろしかったでしょうか。

(大分県 佐藤知事)

年度をちょっと超えるかもしれません。アウトプットはですね。

(記者)

座長にですね、増田寛也さんを充てられるということでしたけれども、その増田さんを座長に希望されるっていうところの狙いを佐藤知事にお伺いできれば。

(大分県 佐藤知事)

今年の1月に「九州・四国広域交通ネットワークシンポジウム」を開きまして、愛媛県からも山名部長さんにパネラーでご出席いただいたのですが、その時に基調講演をしていただいたのが、増田寛也さんでありました。

「人口減少社会を生き抜くために～今こそ九州・四国を結ぶ夢を現実に～」という題でお話いただきまして、そのような意味でこのような地域づくりでありますとか、それから国交省のご出身でもありますし、全国的な国のプロジェクトとしてどういうものを進めるべきであるとか、そういうことについて知見を持っていらっしゃる方で、また、さっき言いました通り1月のシンポジウムでも、非常にポジティブな発言をしていただいた方ということで今回のPFIの研究会についても、そのようなお立場から取りまとめをしていただけるのではないかと思います。ということでお願いをして快諾いただいたということでもあります。

(記者)

どうもありがとうございます。国に対するアピールというか、そういったところもやっぱり期待されてというところもあるのでしょうか。

(大分県 佐藤知事)

増田さんからアピールが特にできるということかどうか分かりませんが、ただやはりいろいろ発言力のある方であるという点は当然、期待をしています。

(記者)

ありがとうございます。

それと増田さんですけれども、昨年度のシンポジウムの中で豊予海峡ルートに関しては人口減を乗り切る上で最優先すべき具体的なプロジェクトの1つだと、というようなご発言もあったのですが、それに関してちょっと中村知事の方にお伺いしたかったのですが、中村知事今もちょっとお話もされておられましたし、昨年の佐藤知事との愛媛・大分交流会議の中でも、この大胆な国家プロジェクトを示さないと、世界における日本の地位が避けられないとい

うようなお話もあったと思うのですが、改めて重複になってしまうかもしれないのですが、この豊予海峡ルート構想、の意義っていうのを伺ってよろしいでしょうか。

(愛媛県 中村知事)

そうですね、これまでに全くルートのないところに新たなルートが加わるということは、本当にそこに新しい市場が生まれるということだと思います。例えば北陸新幹線にしたって、当初あれだけの人が、動くとは誰も予想してなかったわけですね。繋ぐということは伸びしろが出てくるわけですから、全く新しい国土軸ということになると、そこには我々が期待する以上の需要を、今想定できる以上のものが生まれる可能性は十分あると思っていますので、時間はかかっても研究していく。そして次の世代に、今我々が生きている間にできるという保証は全くありません。でも、長い目で見て、今我々が研究をして、また可能性が見いだされたときには次の世代へ伝えていく必要性は責任感としてあるのではないかなというふうに思っています。

(記者)

NHK の後藤と申します。

佐藤知事に velo-city、愛媛県で来年開催される自転車国際会議の件でお伺いしたいのですが、改めて近県です、こういった自転車の国際会議という位置付けではありますけど自転車にまつわるイベントが開かれるっていうこの意義というかインパクトとしては、どういうふうに感じていらっしゃるかということと、これ5月開催ですけども大分県としてそういった開催期間、一緒に何らかの形で関わっていくっていうのを考えるのかどうか。

(大分県 佐藤知事)

大変意義が大きいと思います。世界の中で自転車のレースもそうですし、サイクリングもそうです。健康づくりや、まちづくりといった自転車の活用の意義は大変高く評価されているのですが、日本においても、評価がどんどん上がってきている中で、アジアで台湾に次いで確か2度目の会議だというふうにお伺いしておりますけども、愛媛で開催をされるということで、大変意義も大きいですし、私どもとしても心からお喜びを申し上げたいというふうに考えております。

大分県も何らかの形で、ジョインさせていただくといいますか、何かそのイベントがあればその時にうかがわせていただいて、一緒に取り組ませていただけると大変ありがたいなと思っています。

(記者)

ありがとうございます。

1点だけさっきのサイクリングルートの話でしまなみ海道からやまなみハイウェイみたいな話もあったかと思うのですが、そのあたりどう浸透させるかというか、どう周知してやっていくかっていうのは。

(大分県 佐藤知事)

もう具体的なプロジェクトになっていましてですね、今年のルートづくりということで、愛媛県と連携した豪州からのサイクリスト誘致に繋がるファムツアーということで、取組をしていくということになっております。そのような取組を通じて、例えば豊予海峡を自転車を持って、フェリーで渡ってもらって、両方楽しんでもらうということもいいと思いますし、将来的にはそれこそ豊後伊予連絡道路が繋がって、しまなみ海道も橋の中にサイクルロードがあるというのが大変素晴らしい作りですね。

そのような作りを今度は実際に豊後伊予連絡道路を作っていくときに、これはトンネルの議論もありまして、橋の方が良いのではないかなというのがありますけど、しっかり、そういうことも踏まえて、具体化になるまではちょっと先かもしれませんが、取り組んでいくということが大変重要なんじゃないかなと思います。

(記者)

ありがとうございます。

(愛媛県 企画振興部長)

それでは予定のお時間となりましたので記者会見を終了させていただきます。

本日はありがとうございました。